

凜として — 明治女性の志

松本侑壬子・ジャーナリスト

幕末から明治維新を経て、明治・大正時代の日本近代化の歩みの中で、私たちが知っている歴史上の女性の名前は数多くはない。しかし、“歴史上の女性”とは、誰が決めるのだろうか。どんな尺度で、有名・無名のふり分けがなされるのだろうか。

宮崎信恵監督が、ハンセン氏病の女性詩人の記録映画『風の舞～闇を拓く光の詩～』に続いて世に問う本作の主人公・石井筆子の人間像に圧倒されながら、そんな疑問がふと浮かぶ。同時にまた、凜としたその生き方の魅力に、思いがけない貴石の鉱脈を探り当てたかのような胸の高鳴りをも覚える。石井筆子とは誰か。社会福祉の分野においては「滝野川学園」の創始者の妻にして2代目学園長として既に知る人ぞ知る存在である。しかし、同世代の親友・津田梅子とも平塚らいてうとも、市川房枝とも違い、一般にはあまりにも知名度は低い。知名度の低さに反比例して、何という激動と苦難に満ち、しかも崇高な一生であろうか。

筆子は幕末の1861年、現在の長崎県大村市の上級武士の家庭に生まれた。父が明治維新後の新政府高官(後に福岡県例=知事、元老院議員)となり、11歳で家族とともに上京。当時の裕福な家庭のお嬢さまとして海外留学を含む豊かな教養を身につけ、23歳で結婚。開校したばかりの華族女学校でフランス語を教える一方、鹿鳴館でも目を引く貴婦人ぶりであった。

明治のハイカラ職業婦人で社交界の華 — といえば、まるで少女マンガのヒロインのようだが、筆子の現実はそんな甘いものではなかった。生まれた3人の娘のうち2人は夭折し、夫も35歳で病死。生き残った長女幸子は生まれながらに心身に障害をもっていた。筆子が本当の意味で本領を

発揮するのは、後半生である。幸子を中心にしながら障害者の福祉教育に全力投球する。その拠点には滝野川学園。1891年に石井亮一が設立した社会福祉施設孤女学院を改称し、知的障害児教育を始めた学園である。筆子は広い人脈を生かし、学園の特別資金募集発起人となり、積極的に支援活動を展開する。抑圧されていたはずの明治の女性、筆子の行動力と発言の現代性に驚く。例えば、1897(明治30)年に発表した論考「思ひ出づ(つ)るまゝ」(大日本婦人教育会雑誌に掲載)では一

「男女が此世にあるは云ふまでもなく、同等の権利を具備するものにして、男子の為にあらざるは猶女子の為に男子あらざるがごとし」と胸のすく男女同権思想である。さらに(女子に高等教育を授けると結婚の妨げになるので教育はほどほどになどという考えは)「実に男子の辟論」であり「女子の心理を知らざるものゝ説なり」とばっさり。返す刀で「然るに今日の女子にして之れを聞くも敢て怪しまざるは、数千年来因習の久しき遂に性となりて自暴自棄の念に因る者ならんか」と女性自身の奮起を促し、もし「心に通ふ理想の夫なき場合には、結婚を謝絶するも何の責か之れあらん」と堂々と言いつけている。

筆子の有言実行ぶりは、42歳で6歳半年下の石井亮一と再婚、力を合わせて障害者の福祉教育に全身全霊を捧げた。夫の死後は76歳で第2代学園長に就任、その7年後に自らも園内の一室で数人の職員に見守られて生涯を終える。1944年、敗戦の前年であった。

この映画は地味ではあるが、石井筆子という女性の生涯と偉業を一般に知らしめた意義は大きい。深い感動を覚える。



ドキュメンタリー映画(87分)／宮崎信恵監督

『無名(むみょう)の人—石井筆子の生涯』

上映日程は [http://www.peace-create.bz-office.net] で紹介

